

## 第 21 卷の発刊にあたって

中部大学情報科学研究所長

吉田 年雄

### 1. 20 年を振り返って

情報科学研究所が設立されて 20 年が経過しました。記念の行事を行うことになり、11 月に、細江繁幸先生をお迎えして、設立 20 周年記念講演会を開催しました。それについては、この巻頭言の次のページに記載しました「情報科学研究所 20 周年記念講演会の開催」をご覧ください。

本研究所は、情報科学・技術の重要性に鑑み、学内の関連研究者を組織化し、この分野の研究を促進することを目的として、1993 年 4 月に設立されました。初代所長に当時の電子工学科の主任の故鈴木宣夫教授が任命され、電子工学科、経営情報学科と理学教室などから 21 名の教員が参加し、知能情報、パターン情報、教育情報、ソフトウェアの 4 部門において研究が開始されました。研究所の基本方針として、学会に貢献し、かつ学内教育水準の向上の一助も兼ね合わせて、持てる人材資源の最適活用の観点から、所員の個人個人の得意分野を生かした、言わば、個人ベースの研究推進を行うことになりました。その後、1997 年 4 月に経営情報学科の竹下亨教授が所長に就任されてからは、個人ベースから学際的・共同研究に移行することになり、複数の異部門をまたがった研究者でチームを構成して、プロジェクトを推進することになりました。そこでは、運営委員が行うプロジェクト計画書のピアレビューにより、計画の採否、質の向上、資源最適化（予算額決定）が実施されました。2004 年 4 月に、情報工学科の畑雅恭教授が所長に就任され、その翌年の 2005 年 4 月に、私が所長に就任しました。その頃、新たな特別研究費配分方式が立ち上がり、その結果、研究所予算は半額に減額されました。

1 年後には、研究委員会の要請もあり、数多かったプロジェクトを統合整理して、次の 6 つのプロジェクト「XML 技術を利用した高度情報処理の基礎研究」「画像センシング技術と画像認識の基礎研究」「社会環境情報システム構築のための基礎技術に関する研究」「刺激起因生態多変量および腫瘍細胞に見られるパターン等の解析」「Web の教育への活用」「数理科学の基礎研究」で新たなスタートを切りました。また、限られた予算で、最大の研究成果を出すべく、運営委員が行うプロジェクト計画の評価により、配分額は、所員が申請した金額の異なる 4 つのプロジェクト実行案（S 案、A 案、B 案、C 案）のどれかに決めるようにしました。この頃から、研究所予算は、学外の競争的研究資金（科研費や財団の研究支援金など）獲得のための準備金という性格に変化していきました。

## 2. 20周年記念号の発刊

本号を「リサーチジャーナル 20周年記念号」として刊行することになりました。20年間継続して発行してこられたのは、中部大学の研究所に対するご支援と、所員のジャーナル発行に対する熱意に負うところが大きいと思われます。改めて、大学当局と所員の皆様に感謝します。

## 3. 研究所長退任

この3月で研究所長を退任することとなりました。8年間にわたって、所長の職を務めてこられたのは、所員の皆様の研究所に対する献身的なご尽力とご支援によるものと深く感謝しております。運営委員の教員の方々には、各年度、所員の予算の額を決めるために、各プロジェクトを審査していただき、協力していただいたことを感謝します。毎年、10月あるいは11月に行った講演会では、所員の方々から、講演者の候補の推薦をしていただき本当に有難うございました。お蔭様で、すべての講演会を悔いのない形で行うことができました。また、講演していただいた方々にも深く感謝致します。

## 4. 出会いと感謝

定年まで1年となりましたが、ここで、勝手ながら、私の研究者としての道を振り返ることをお許し下さい。

生まれ故郷の名古屋を離れ、慶応義塾大学工学部に通うようになり、1年後、引っ越した先の下宿（下宿人：3大学8人）で、同大学の他学科（管理工学科）の優秀な先輩の中西正和さんに出会いました。先輩の紹介で、3年生の夏にFORTRANの学内講習会を受ける機会がありました。その頃は、電子計算機は未だ珍しい存在であり、先輩の学科の学生だけは電子計算機を使用することができましたが、私の所属する電気工学科では誰も使っていない状況でした。その講習会に出たお蔭で、簡単なプログラムなら何とか組めるようになり、学生実験の課題での面倒な計算（通常、手回し計算機を使用）に、特別に、電子計算機を使って、楽に結果を出すことができました。その体験から、将来は電子計算機が重要な位置づけになることを直感的に感じました。

その後、名古屋に戻り、名古屋大学大学院に通うことになりました。電子工学第6講座の三木七郎教授の研究室に配属となり、そこでは、マイクロ波工学の研究を行うことになりました。半導体が専門の梅野正義助教授（しばらく後に、名古屋工業大学教授、同大学副学長、中部大学教授）の下で、円筒の磁性体を挿入した導波管のマイクロ波透過特性の研究を行うことになり、私の希望する電子計算機を利用した研究がスタートしました。そこでは、実数変数および複素変数のベッセル関数の計算プログラムが必要になりましたが、複素変数のベッセル関数（円筒関数とも言われた）を計算するプログラムは存在せず、大変に困りました。しかし、実数変数のベッセル関数を計算するプログラムは手に入ったの

で、そのプログラムを参考にし、工夫を行い、複素変数のベッセル関数を計算する方法を考えました。色気を出して、その計算法をまとめ、論文にして、専門外の情報処理学会に投稿しようとしたのは、博士課程1年の秋だったと思います。たまたま、梅野先生の勧めで、偶然、梅野先生のお宅の隣に住んでみえたベッセル関数などの数値計算を専門とする二宮市三先生（工学部共通講座教授）に、作成した論文をレビューしてもらうため、先生の研究室を訪ねました。そのとき、論文はむやみやたらに書くものではない、完成度の高いものだけを出すべきだと正論を言われ、こういう筋を通す先生もいるのだと感心しました（大抵、指導教授は、論文を書け、書けと叱咤激励するものです）。また、レビューしてもらう以上、二宮先生との連名にすべきと思ひ、そのことを話すと、今度は、やたら連名にすべきではないと言われ、その実直さに、さらに感心しました。その論文を投稿して2か月後、論文の修正意見がついた査読結果が送られてきたので、それを二宮先生に見せると、少し直せば採録されるでしょうと言われました。しかし、その時点で、完成度のより高い、複素変数のベッセル関数の論文を作成していたので、修正意見のついた論文を取り下げ、新たに投稿し直しました。今度は、その論文には修正意見がつかず、直ちに採録されました。本来の専門としている電子工学の論文は、なかなか採録されないのに、道具として使う計算法の論文は簡単に採録されてしまいました。しかし、工学博士になるには、電子工学の分野で論文を書かなければならなりません。論文となるテーマ探しに随分苦労しました。

そろそろ就職を考える時期である博士課程の3年目になっても、名古屋・東海近辺の大学の講師、助教授のポストは全然見つかりませんでした。電気・電子工学科のように非常に優秀な学生が集まるような大学院の中にあっては、私のような凡庸な学生は先が暗い感じでありました。しかし、それでも、他の講座の教授が1年間、助手のポストを貸して下さるということになって、今後の就職活動に少しだけ希望（猶予）がもてました。将来に明るい展望が開けない次期に、具体的には、私が博士課程3年生であったときの2月に、予想もしなかったことでしたが、情報工学専攻（大学院だけで、学部はなし）が新設され、そこに、二宮先生が移られる予定であるという話を聞きました。そこで、私は、一人で、二宮先生の研究室を訪ね、私を助手にとってくださいとずうずうしく頼みました。そのとき、二宮先生は、新設予定の講座は、衆議院を通ったけれども、参議院が未だ通っていないと言われました。予算案は衆議院を通れば、1か月後に自動的に通過して成立することは誰でも知っているのですが、私は参議院を通れば助手として採用してもらえますかと尋ねたところ、その場で、私を採用しますと言われ、大喜びで大学院生室に戻ったことを思い出します。私にとって、この先、電子工学より、情報工学の方が何となく合っているのではないかとも思ったものです。

電子工学の他の講座の助手になって3か月後に、晴れて情報工学第2講座の助手になりました。今度は、借りたポストではなく、正助手のポストであり、その半年前までは、名古屋大学の助手になれるとは、とても思えませんでしたので、本当に幸運でした。これも、

大学時代に、電子計算機の使用を体験させてくれた中西正和さんに出会ったこと、また、大学院時代に、円筒状の磁性体の伝搬特性の研究テーマを与えてくれた梅野正義先生に出会ったこと、複素変数のベッセル関数が必要になり、自分で計算法を開発し、論文を作成し、その論文をみてもらった二宮市三先生に出会ったことのお陰と思います。この三人は、研究者の道を歩み始めることができるようになるきっかけを与えてくれた大切な人であり、今もずっと感謝しています。残念ながら、中西（10年程前、同大学教授在職中に病死）さんと二宮先生は亡くなられています。

私が、助手になって12年後の3月末、二宮先生は退官され、中部大学経営情報学部へ赴任されました。その少し前に、講座の助教授が教授に昇格することが決まり、4月1日から新体制になりました。その3か月後に、その教授から、私に地方国立大学に行かないかと打診がありました。びっくりして、中部大学まで二宮先生を訪ねました。そのとき、先生は、これまで、私の昇格が実現しないことが変だなと思っていたと言われ、実は、昇格前の助教授に、（私の）業績は申し分ないので、（私を）助教授に昇格させることを教授昇格の条件にしておいたと話されました。さらに、こんなことなら、一緒に昇格させておけばよかったとも言われました。そのとき、まさか、そこまで私の業績を評価し、私のことを考えてくださっていたのかとは夢にも知らず、非常に有難く思い、落ち着いた気持ちになれたことを今でも思い出します。その年の9月頃、翌年4月の中部大学赴任が決まりました。その後、近くの国立大学から採用のお誘いの話が来ましたが、先決の中部大学に赴任しました。二宮先生との出会いがなかったら、私の人生は大変なことになっていたと、今でもめぐり合いの幸運を感謝しています。

中部大学では、電子工学科と経営情報学科の教員や事務職員には親切にいただきました。研究費にも困ることなく、また、研究成果も極度に要求されることもなく、私自身が最も成就したい研究に打ち込むことができました。所属した経営情報学部では、赴任後の数年後に大学院修士課程、その2年後に博士課程を設立することになり、文部省の設置審の審査を受ける前には、研究成果を挙げるためにかなり頑張りましたが、それ以外は、情報工学科に移籍した後もマイペースで研究することができました。前任校で行ってきた特殊関数の数値計算法の研究をずっと定年近くまで継続的に続けてこられたことに感謝しています。私は、情報科学研究所設立時からのメンバーであり、研究所のお蔭で、研究成果を出せたと言っても過言ではありません。その意味で、大学当局にも感謝しています。

#### 4. おわりに

今年度も情報科学のいろいろな分野の研究成果の集約として、ジャーナル（20周年記念号）を発行することができました。そのジャーナルの編集に貢献された板井陽俊助教、編集員の方々と本研究所の事務運営に尽力された小塚美佳事務員に深甚なる謝意を表します。